

令和3年度

北海道教育大学

附属函館幼稚園だより

NO. 2【号】



相補的交流の心的効果

附属函館幼稚園園長 外崎紅馬

ある日の保育室でのことである。クラス担任の先生が、園児に季節感を楽しめるような折り紙を用いた造形の指導を行っていた。私も何気なく保育室の後ろのほうに居場所を見つけ、その様子をほのぼのとした気持ちで眺めていた。担任の先生は折り紙の折り方が理解しやすいように途中までの折り方を説明し、園児がそれに取り組み、説明したところまで出来たら次の折り方を説明するというように折り方を段階的に分けて進めていた。

しかし、A君はうまく折ることができず、「わかんない」と声をあげた。たまたまそばにいた私が、A君に「こう折るんだよ」と手助けをした。「あ、出来た！」とA君は嬉しそうである。担任の先生はA君とクラス全員の進み具合を確認しながら、次にどう折るか、その折り方を範示した。

だが、A君はまた「わかんない」と声をあげた。そんなに難しい折り方でもないはずなのに妙だなと思ったが、今度もまた「こう折るんだよ」と手助けをした。間を置いて次の段階の折り方が示された。そしてまたA君は「わかんない」と言い、私のほうをチラチラと見た。どうやらA君は私とのやりとりを楽しんでいるようだ。私は微笑ましくなって、A君に「ちゃんと聞いてた!？」とからかうように言ってみた。A君は「うん、ちゃんと聞いてた!」と嬉しそうである。

私とA君の様子を担任の先生もまた微笑ましく感じたのか、特に何も言わずそのまま次の折り方を説明した。案の定、説明の後、A君が私のほうを見た。そして言った。

A君「わかんない」
私「わかんない」
A君「どうやるの？」
私「もう教えなない！」
A君「えー！ 教えてー！」

かわいいなあと思いつつ、折り方の手助けをしようと思ったら・・・あれ、どうやるんだ？ 説明を聞いてわかったつもりでいた折り方が、いざ折ろうとしたらうまくいかない。A君と一緒にあって、あれこれ試したがうまくいかない。今度はとうとう私が言うはめになった。「先生、わかんない」。

この出来事がA君には新鮮だったらしい。担任の先生に私が折り方を教わってる隣で、A君は終始ニコニコしていた。そして、それ以後、私を見かけるたびに「また一緒に遊ぼうね」と声をかけてくれるのである。